

の者なり。是を突伏せたるは、敵も功の者なるべし。然れども直鎧の本意を知らずと見ゆ。小右衛門は、大身の二間柄の鎧の石付を片手に取りて、突出す事麻木をふるが如しと。或は水風呂に水一杯にはりて、是を彼方へやすくと持ちありく事をしけり。大男にて、肩の厚さ一尺あり。或時馬捕を使にやらんといへば、馬捕のいふ。我等は馬の儀は勤可申、外の儀は不存といへり。小右衛門聞きて尤なり。我あやまりたりとて、暫く有りて馬を露地へ牽出させ、昨日乗りて見れば、馬が殊の外肩を痛む躰なり。かたかひが起りたるなるべしとて、馬捕に終日終夜馬の肩をば捻らせけり。馬捕大きに迷惑し、以後は何事にも勤めけるとなり。是よりして、肩かひ小右衛門とぞ異名しけり。鳴原陣に、加州より小右衛門を指遣さる。彼の地に於て高名ありとぞ。按ずるに、小右衛門は、可觀小説にも、山崎肥前守吉家の孫、山崎種善坊が子にて、山崎閑齋と従父兄弟也とあり。種善坊は、陳善録に、山崎種善坊儀、利家様御氣に入りてかはゆがらせられ、富田下總ためにをち也。官腰などの代官いたし、知行は二百石被下置、利家様の御書院

の内にて煩出し、たはごとにはや参り申すくと申して相果つ。則野田山利家様御塚の下に、ぬし塚をつき申すやうにと申置、其通にいたし候。と見ゆ、三壺記には、山崎種善坊利家卿御葬禮の御供し、野田山にて御靈顔を拜し奉度、御暇乞の爲とて、御棺の蓋を押明けのぞきければ、匂ひほつと鼻に入り目をまはし、煩付き終に果てたり。心ならずの御供致したる者哉と、諸人申しあへり。とあり。

○織田織部邸跡

長町六番丁の末、北側也。延寶の金澤圖に、織田小八郎前口二十五間三尺・奥行東側三十三間三尺・西側三十二間と見え、元祿六年の土帳に、織田小太郎長町山崎半左衛門末とあり。織田氏元祖織部は、織田有樂の孫、河内守長孝の三男也。利常卿に奉仕し、三千石を賜はり、寛永十七年侍従利治卿越中富山へ入部の時、富山の隨士と成り、富山へ搬宅せしかど、承應二年富山の國用不足に付、織部以下五名金澤へ返され、明暦三年江戸にて歿す。二代織部は、父遺知の内二千五百石を賜はり、延寶元年没す。無子、弟小八郎信重を嗣子とし、家督を繼がしむ。信重の曾孫主稅益方

家老役を勤め、五百石加恩ありて三千石とし、子孫之を襲ぎたり。且その邸宅も世々居住すといへども、廢藩の際家屋を毀ち、地所を賣却し、今は畠地と成りたり。

○織田氏邸跡古井

龜尾記に云ふ。織田氏の第地に古井あり。其の筒に鳩巢老人の銘あり。好事家乞ひて石刻とす。今は苔むし、文字定かに見ゆがたし。鳩巢老人の邸、此の邊にありしと云ふ。とあり。今此の古井、既に埋もれたるか詳かならず。

○室鳩巢舊邸

鳩巢翁は、舊藩五世參議從三位綱紀卿の儒士にて、幼名を室順祥と稱し、長じて室新助直清といへり。元祿六年の土帳に、室新助居室長町織田小八郎近所。とあり。或人曰く、鳩巢翁の金澤に居たる時の舊邸は、織田氏の居邸より法船寺町へ出る間なる武士家にて、藩士中川武十郎と云ふ人の舊邸是なり。中川氏退去の後は、岡田某といふ人居住すといへり。按ずるに、右中川氏邸は、織田氏の向角なる佃氏の舊邸の横にて、延寶の金澤圖に青木義兵衛の居宅とするものなり。こゝに載せる延寶金澤圖にて勘考すべし。

